

先輩から⑧「子供と良い関係を作ろう」

私が特別支援の教師に成り立ての頃、先輩から教えられたことです。

『先生が、「児童生徒と仲良くなりたい」と思う。それは自然なことだし、良いことだ。しかし、「好かれない」と思ってしまうはいけない。「好かれない」という思いは、「こび」につながる。叱るべきところで叱ることができなくなる。普段の生活でも「教師と生徒」という関係性がはっきりしなくなる。「好かれない」という気持ちは、指導者がもつ感情から一番遠いところにあるべき感情である。』

そして、先輩は、こう続けました。

『そうは言っても、児童生徒とは仲良くなって、毎日、気持ちよく過ごしたいよなあ…。絶対に仲良くなれる方法があるけど、知りたいか？』

私は、強くうなずきました。答えはこうでした。

『それは、その子を好きになることだ。「あなたが好きです」という気持ちと態度で接してくれる人を、人は、そうそう嫌いにはなれないからな(笑)。』

以来、私は、この教えを心に刻んで教師生活を送ってきました。

先輩の言ったとおりでした。

「好きになる」と、その子の言葉、動きに心が向くようになります。そして、気持ちや体調の変化とその理由に気付きやすくなります。

悪いところより、良いところが目に入るようになります。そして、褒める言葉掛けが多くなります。

こだわりがあつたり、自分の世界をもっていたりする児童生徒にも同様に、「(その世界に)まぜてください」「一緒にいさせて」という姿勢で関わり始めるので、徐々に受け入れてもらえるようになります。

「思いは言葉に。言葉は態度に。」という、良好な人間関係を築くための言葉がありますが、これは、教師と生徒という人間関係にも当てはまります。思いは、言葉や態度にすることで、伝わるものです。

好きだという思いが伝わると、児童生徒はわがままになったり、自分勝手になるのでしょうか？ 答えは否です。「好き」が伝わると、その子は一生懸命に活動に取り組み始めます。

注意をしたときも、素直に真剣に聞いてくれるようになります。

そして、この「好き」効果は、保護者の方にも波及します。先輩の言葉を借りれば「自分の子供を本当に好いてくれる先生を、保護者はそうそう嫌いにはならない」というところでしょうか。

「まず、好きになる。」これが、スタートだと思います。

先輩は、こうも言っていました。

『教師に必要な最低限の力は、知識でも経験でも技術でもなく、人を好きになれる能力だ。』